

令和元年6月25日現在

機関番号：13101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K12190

研究課題名(和文)介護老人福祉施設における『より良い看取り』実現への取り組み

研究課題名(英文)Promoting "End-of-life care" in facilities for the aged in Japan

研究代表者

小山 千加代(Koyama, Tikayo)

新潟大学・医歯学系・教授

研究者番号：50597242

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：アクションリサーチの手法を用いて、「介護老人福祉施設における『より良い看取り』実現への取り組み」を実施した。職員と共に看取りへの願いを表明し、施設であるからこそ可能となる看取りを実現し、その取り組みの過程でチーム全体に生じた意識的・行動的变化のプロセスを明らかにした。また、職員が中心となり「ホームでの看取りケア」と題したリーフレットの作成も実現し、現在、東京都内の3施設で使われている。

研究成果の学術的意義や社会的意義

B施設で作成した「ホームでの看取りケア」というリーフレットは、同系列のA施設、C施設でも利用されるようになり、利用者とその家族への説明の際に使われている。本研究においては研究者と介護施設の職員との協働の可能性と、その方法論の有効性を示すことができたと考えている。高齢社会にあつて、施設での看取りの改善を問う本実践研究は他施設においても参考になり、老年看護の向上に寄与する。

研究成果の概要(英文)：The subject of this research was the approach to attaining "better End-of-life care" in nursing home facilities for the elderly. The purpose of this study was to elucidate the process of mental and behavioral changes that occurred in the team as a whole by conducting regular study sessions with the researchers and the staff of the nursing home using the method of action research. In terms of results, the team was able to attain the five aspects of [deep interest in sharing], [realization of meaning in sharing], [process of exploration], [deepening of "knowledge" and gaining a perspective of joining together], and [transformation], and for the aspect of [transformation], an evaluation of actual nursing care practice and "better nursing care" that uniquely applies to nursing homes was achieved. The research has also led to publications, including the preparation of an outcomes report as a "End-of-life care in nursing home facilities for the elderly" leaflet and a book.

研究分野：高齢者看護

キーワード：介護保険施設 特別養護老人ホーム 看取り ミューチュアル・アクションリサーチ 協働

1. 研究開始当初の背景

本研究は、改定介護保険法制定までは看取りの機能を持たなかった介護老人福祉施設(特別養護老人ホーム)においても、利用者個々の人生の終焉を引き受け、施設ならではの看取りの文化が醸成されることを願って行われる研究であり、看取りの蓄積が少ない施設において「より良い看取り」を実現しようとするものである。

2. 研究の目的

研究の目的は、「介護老人福祉施設における『より良い看取り』実現への取り組み」である。ミューチュアル・アクションリサーチの手法を用い、研究者が介護施設の看護師・介護士とチームを組み、相互依存的な関係の中で、看取りの課題を明確にし、施設であるからこそ可能となる看取りを実現する。そして、『より良い看取り』実現への取り組みに際して、チーム全体に生じた意識的・行動的变化のプロセスを明らかにすることであった。

3. 研究の方法

- (1) 研究者と現場の実践者が協働し、研究チームを組織して、定期的な「看取りの勉強会」を開催し、相互作用しながら現場に変化をもたらすミューチュアル・アクションリサーチの手法を用いる。理論的基盤は、ロジャーズ、ニューマンの「統一的かつ変容的パラダイム」に依る
- (2) データ収集方法は、「看取りの勉強会」の逐語録 各参加者のジャーナル(振り返り記録) 研究者のフィールドノート 看護・介護記録であった。
- (3) 分析方法は解釈学的・弁証法的方法を用いた。
- (4) データ収集施設は「看取り介護加算」が認められる条件を備え、看取りケア指針に沿った看取りの経験の蓄積が 10 年程度ある東京都区内の介護老人福祉施設(以下、特養という略称を用いる)A であった。運営は、区より委託されている 事業団であり、施設長をはじめ介護サービス課長および施設の職員は 事業団に所属している。平成 7 年に開設され、利用者の定員は 110 名(うち短期入所 10 名)、看護師は 5 名(含非常勤)、介護士は 55 名(含非常勤)、医師は 5 名(全員契約)、相談員 2 名、管理栄養士 1 名、機能訓練指導員 2 名(含非常勤)、他に夜勤看護師を毎日 2 名配置している。利用者の平均介護度は 4.4、平均年齢は 88.5 歳であった。
- (5) 研究参加者は、主要メンバーとして施設長 1 名、看護師 2 名、介護士 9 名、相談員 1 名、栄養士 1 名、機能訓練指導員 1 名の計 15 名であった。また、介護士の特養での勤務経験年数は平均 8 年で、長い人では 21 年、短い人では 1 年であった。新人、中堅、ベテランが混在して構成された。各回の「勉強会」参加者は、平均 12 名であった。2016 年 4 月には、職員の異動によって、施設長、看護師 2 名、機能訓練指導員 1 名、介護士 2 名が交代したとともに、介護士 2 名が新たにメンバーに加わった。なお、参加者は全員が特養での看取りを経験していた。

4. 研究成果

- (1) 「看取りの勉強会」のテーマと「願いの表出」について

表 1 勉強会テーマ

| 回数 | 勉強会テーマ | 参加者 | まとめ |
|----|--|-----|-----|
| 1 | 看取りに対して普段感じていること | 15 | 願い |
| 2 | より良い看取りについて | 11 | 願い |
| 3 | どのような看取りをしたいと思うか（利用者はどのような看取りを望んでおられるか） | 12 | 願い |
| 4 | 図書（文献）を各自読み、感想を述べ、意見交換 | 14 | 願い |
| 5 | なぜ、看取り介護加算がついているのか | 10 | 願い |
| 6 | グループ作業「看取りへの願い」「目標」 | 15 | 願い |
| 7 | より良い看取りのための方策 | 12 | 願い |
| 8 | Aさんの事例（胃瘻の利用者で、最期は病院に搬送されて死亡した事例） | 12 | 事例 |
| 9 | Bさんの事例（経口摂取可能で現在進行形の事例） | 14 | 事例 |
| 10 | 胃瘻の人の看取りと経口摂取の人の看取りの違いについて、職員の認識の違いについて話し合った | 12 | 事例 |
| 11 | 看取りケア開始直前のケース検討 | 6 | 事例 |
| 12 | 平成 28 年度に看取りケアを実施した 4 件のケース検討 | 11 | 事例 |

「看取りへの願い」の表出について(7回までの逐語録の分析から)

施設のサービス委員会の位置付で始められた「看取りの勉強会」となったこともあり、初回から個々の体験に根差した看取りへの思いが語られ、第7回目の「勉強会」で、「利用者の希望に添ったケアがしたい」という、この施設職員が考える”より良い看取りへの願い”が表出された。そして、食事をはじめとした日常生活援助の工夫をしよう、今まで通りの関係を大切に、ケアをしよう、チームがまとまり、個々の看取りの不安をやわらげよう、看取りを良くするために勉強を続けよう、個々の立場で出来ることを考えよう、他の人のケアもあるが、気にかけてそばに行こうという6つの願いが表出された。

(2) 意識と行動の変化について(12回までの振り返り記録の分析から)

アクション・リサーチによるホームでのより良い看取り実現の過程は、「勉強会」チームが、初期には職種や職位を超えて意見を【共有することへの深い関心】を示し、意見を交わす中で他者を理解し、自分自身をも省みるという【共有することの意味の獲得】に至り、願いを達成するための【手立ての模索】に時間を要して悩み、実践を省察しながら【「知」の深まりと寄り添う者としてのまなざし】という看取りの本質を学ぶことで、ホームならではのより良い看取りを実現して【変容】に至る、特徴的な5つの局面をたどったと説明することができた。

(3) 局面5における変容について より良い看取りの実現

「看取りの勉強会」も12回目になると、看取りの事例が数例蓄積されてきて、ホームでは、家族と職員両者が日々のその人の様子を綴りながら寄り添い、安らかに亡くなられた事例報告がされるようになった。意見を交わした後の振り返り記録では、次のような「チーム

のありよう」が捉えられた。

《安楽な最期を迎えて頂くことができたことは評価される》。何事も《思った時に行動すべき》だと改めて考えた。これからも利用者とその家族に《時間を作って接していきたい》。

《利用者の気持ちを引き出したい》し、もっと《家族への援助が必要》とも思う。《他の職種とともに事例を振り返ることができた》ことは互いを認め合うことにつながった。ここで学んだことを、《次に活かしていきたい》。そしてこれからも《良いケアとは何かを考えながらケアしていきたい》と思う。

このような局面 5 における職員の変化は、ロジャーズ ニューマンの「統一的かつ変容的なパラダイム」に照らし合わせれば、「変容」と表現できるだけの大きな変化を遂げたと考えている。例えば、病院から施設に戻ってこれた利用者の看取りを引き受け、「お正月を一緒に迎えたい」という家族の切実な思いを心に留めて、「家族との連絡ノート」を作成した事例は、連絡ノートを通して職員と家族との心の交流を深めたとともに、利用者の状態に一喜一憂しながら残された日々を一日一日を丁寧にケアをしている職員の様子までが織り込まれたものであった。「連絡ノート」という小さな工夫がケアされる者とケアする者との相互関係を深くし、「母が私に残してくれた最後のプレゼント」と語った家族にとっては、そのノートに書きこまれた日々の記録が、親しい人を失ったことの悲しみを和らげ、新たな家族の日常を取り戻すための心の支えとなると思われた。それは、決められた業務遂行に偏りぎみだった「従来の看取りケア」には見られない実践であり、明らかにケアのパターンが変化したと理解されるものであった。

文献

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

小山千加代、老いと死、そしてそれを看護ること 個人的な体験から THE LUNG perspectives, Vol.25 , No.4, 2017 年 92-96 メディカルビュー社

小山千加代、高齢者の生活の場と看取りに関する問題 THE LUNG perspectives, Vol.25 No.3, 2017 年, 98-102 メディカルビュー社

小山千加代 臨床死生学からみる生と死の問題を取り巻く流れ 2017 年 THE LUNG perspectives, Vol.25 No.1 , 2017 年 100-103 メディカルビュー社

〔学会発表〕(計 4 件)

小山千加代, 大西奈保子, 菊永淳 他

「特別養護老人ホームにおいて「より良い看取り」を実現するための取り組み 研究者と施設の職員との協働によるミューチュアル・アクションリサーチ」

第 24 回日本臨床死生学会 千葉県立保健医療大学 2018 年 10 月 13 日

大西奈保子, 小山千加代, 菊永淳 他

「特別養護老人ホームにおける看取りへの取り組み：第2報(2)「事例報告」胃瘻造設者は看取りの対象ではない」第22回日本老年看護学会 名古屋国際会議場 2017(平成29)年6月16日

小山千加代, 大西奈保子, 菊永淳 他

「特別養護老人ホームにおける看取りへの取り組み：第2報(1)「変容」看取りに対する意識と行動の変化」第22回日本老年看護学会 名古屋国際会議場 2017(平成29)年6月16日

小山千加代, 大西奈保子, 菊永淳 他

「特別養護老人ホームにおける看取りへの取り組み第1報：「勉強会の開催」」

日本老年看護学会第21回学術集会 大宮ソニックシティ 2016(平成28)年12月10日

〔その他〕(計1件)

リーフレット「ホームでの看取りケア」1500部作成 特別養護老人ホーム3施設で活用
2017年5月

〔図書〕(計2件)

小山千加代編著、エム・シー・ミュージズ、看取りへの願い、2019年、136

小山千加代編著、エム・シー・ミュージズ、サイエンスとアートとして考える生と死のケア、
2017年、204

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：大西 奈保子

ローマ字氏名：ONISHI, naoko

所属機関名：帝京科学大学

部局名：医療科学部

職名：教授

研究者番号：60438538

研究分担者氏名：菊永 淳

ローマ字氏名：KIKUNAGA, jun

所属機関名：新潟大学

部局名：医歯学系

職名：助教

研究者番号：50634862